●〈症例〉

PETがステージ診断に有効であった
食道悪性黒色腫の1例

小野敏嗣¹⁾ 鴨志田敏郎 落合敏広 柿木信重
石川晶久 岸本 洋輔 平井信二 岡 裕爾
下釜達朗²⁾

¹⁾日立総合病院／内科, ²⁾同／病理科

〔Key Words〕食道悪性黒色腫, 生検, PET

和文要旨

症例は59歳男性。健診で指摘された中部食道扁平隆起性病変の精査目的に上部消化管内視鏡検査を施行し、生検の結果から食道原発悪性黒色腫と診断された。CTではリンパ節転移が疑われたが、PETにて否定され外科的切除により治療しえた。食道原発黒色腫は稀ではあるが、積極的に生検による診断を行う必要があり、また適切なステージングにより治療可能な疾患であるため、PETの有用性も含めて本症例を報告する。

はじめに

悪性黒色腫は転移能が高く、化学療法、放射線療法に抵抗性である予後不良の皮膚悪性疾患だが、食道原発のものも稀ながら存在している。食道原発の悪性黒色腫も予後は不良とされているが、近年は早期発見例が増加しており予後は徐々に改善してきている。その中で、今回我々はPETがステージ診断に有効であっ

た食道悪性黒色腫の1例を経験したので報告する。

症 例

患者：59歳，男性。

既往歴：B型肝炎ウイルスキャリア。

家族歴：肝疾患はあきらかでない。

現病歴：経年健診受診者。2004年5月19日，人間ドックの上部消化管造影検査で胸部中部食道に扁平な隆起性病変を指摘され，6月4日に当院紹介受診となった。

初診時現症：表在リンパ節を触知せず。

初診時検査所見：血算・電解質・腎機能・肝機能とも正常範囲内。HBs抗原陽性。受診時の上部消化管造影検査では中部食道に扁平隆起性病変を認め，上部消化管内視鏡検査では門歯より35cmに非ヨード不染性の黒色調扁平隆起性病変を認めた(Color 1)。同病変に対して生検を施行し悪性黒色腫と診断された。皮膚科対診では皮膚病変は指摘されなかった。リンパ節転移を検索する目的に施行された胸腹部造影CTでは第3群リンパ節にあたる右側気管支リンパ節がΦ10mm程度に腫大して認められた(Fig. 1)。しかし，PETを施行したところ原発巣以外に取り込みを認めなかったことからリンパ節転移ではないと判断し，7月28日に食道亜全摘術が施行された(Fig. 2)。

摘出後の標本では食道胃接合部から口側10cm程度の部位にΦ30×20mmの表面平滑な黒色調の粘膜下腫瘍様の病変を認め，病変の浸潤は粘膜下層に留まっていることが確認された(Color 2)。壁内転移・リンパ節転移も認められず，0-Isep, pT1b(sm), pIM0, pN0, stage Iと診断された。病理学的には異型メラノサイトの増殖とメラニン沈着を認め，HMB-45・MART-1染色とも陽性であり，悪性黒色腫と診断し

Fig. 1 Computing tomography study suggested the possibility of metastasis to right tracheobronchial lymph node ; 15mm in diameter.

Fig. 2 PET revealed that up-takes were limited at its primary focus of esophagus.

た。本症例では術後経過も良好であり、その後の外来通院において再発は認めていない。

考 察

食道原発悪性黒色腫は全食道悪性腫瘍の0.1～0.2%と非常に稀な疾患で、発症平均年齢は60.4歳と食道癌に比較してやや若年であるとされている。出現する症状は嚥下困難が多いが、食道癌に比較して腫瘍が軟らかく浸潤が軽度であるため症状が出現しにくいとされている。発症部位としては中・下部食道が70%以上を占めると報告されている。肉眼的には広基性病変が多く、表面は平滑だが時に潰瘍形成を認めることもある。色調は必ずしも黒色ではなく、その半数はメラニン色素を欠いているという報告もある。また食道原発悪性黒色腫の約30%に食道メラノーマが合併するという報告があり、その関与が強く疑われている。

確定診断は病理学的に行われるが、悪性黒色腫では生検に伴う播種の危険性が以前より指摘されている。しかし、本邦報告例では生検による播種の報告はなく、生検の有無による5年生存率は有意差を認めないとする報告¹⁾もある。また皮膚の悪性黒色腫についても生検は予後に有意な影響を及ぼさないということも最近報告されており²⁾、すなわち早期に確定診断を得るためには積極的に生検を行うべきであると考えられる。ただし、頭頸部の皮膚病変の切開生検についてはその限りではないとする報告もある³⁾。

食道原発悪性黒色腫の予後については60歳以上・T2以上・リンパ節転移陽性・遠隔転移有りですと予後が悪いと報告されており、そのためにも早期に確定診断を得てステージングを行うことが重要と考えられる。

悪性黒色腫は食道原発悪性腫瘍としては稀ではあるが早期に適切な治療を行わなければ予後不良であることから、その存在を十分に認識しておく必要があり、その生検に伴う播種の危険性については予後に有意差はなく早期確定診断に伴うメリットの方が大きいと考えられる。またそのステージングにおいてはPETが有用であった。

文 献

- 1) 山口智弘, 塩飽保博, 小出一真, 他: 食道原発悪性黒色腫の1例と本邦報告例(193例)の検討. 日消病会誌, 101: 1087—1094, 2004.
- 2) Lees VC, Briggs JC et al: Effect of initial biopsy procedure on prognosis in stage I invasive cutaneous malignant melanoma: review of 1086 patients. Br J Surg 78: 1108—1110, 1991.
- 3) Austin JR, Bayers RM, Brown WD et al: Influence of biopsy on the prognosis of cutaneous melanoma on the head and neck. Head Neck 18: 107—117, 1996.

〈カラーは2頁に掲載〉

A case of esophageal malignant melanoma and PET for its precise staging

Satoshi Ono ¹⁾	Toshiro Kamoshida
Toshihiro Ochiai	Nobushige Kakinoki
Akihisa Ishikawa	Yosuke Kishimoto
Shinji Hirai	Yuji Oka
Tatsuro Shimokama ²⁾	

¹⁾Dept. of Internal Medicine, ²⁾Dept. of Pathological Anatomy, Hitachi General Hospital.